
アダイヴ

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アダイヴ

【Nコード】

N5256F

【作者名】

柊

【あらすじ】

ようやく戦争が終結し、世界が復興に向かおうとした矢先に世界中を未曾有の異常災害が襲うようになった。そして、明日には世界が終わるという話を突き付けられたアキラは、幼馴染のミリィと共に世界の終わりを見に行く。

第一話：二人で教会は無理だな（前書き）

以前はこちらのサイトに投稿していましたが、最近は出版社のライトノベル大賞などに応募していました。しかしこれからは小説家になろうで執筆していこうと思います。

小説の執筆は数ヶ月ぶりで、これは復帰作です。至らない部分もあると思いますが、よろしくお願いします。

第一話：二人で教会は無理だな

半壊した薄暗い聖ミルド教会の聖堂の中でミリイは膝を抱えていた。ススで薄汚れたブロンドヘア。蒼い瞳は虚ろだった。疲労の色が彼女の顔にははつきりと浮かんでいる。

「明日には世界が終わるって本当なの？」

薄々そうなるのではないかと予想していたアキラにとって、彼女の言葉大して驚くことはなかった。ただ、明日という言葉は予想外だった。

「誰がそんなこと言ってたの？」

ミリイの横で壁にもたれかかっているアキラは、小刻みに揺れるランプの灯火を見つめながら聞いた。聖堂の中を照らすのは月光を透過させたステンドグラスの寂しい温もりと、二人の間に置かれた一つのランプだけだ。

「師父様たちが集まって話しているのを聞いたの。どこかの偉い学者様が計算したら、明日の朝には世界が終わるんだって」

悲壮。絶望。恐怖。

それらの合わさった声でミリイは呟いた。

「終わるって、どんな風に？」

「……分かんない」

長らく続いた戦争で疲弊したこの国を連日のように大地震が襲うようになったのは、終戦協定が締結されてすぐのことだった。他国でも同じように地震が発生し、地震のない国では異常気象が多発していた。同時に世界中が未曾有の異常気象に晒されていたのだ。

「分かんないよ、そんなの……」

膝を強く抱いてミリイはもう一度、今にも掻き消えてしまいそうなか細い声でそう言った。ステンドグラスを介して差し込む虹色の

月光が怯える彼女を照らし出す。

「ミリイは気にならない？」

アキラはわざと明るい口調で言った。少しでも彼女の恐怖が和らぐように。もう、この教会には二人しかないはずだった。頼れる大人なんていない。だから、今ここにいる幼馴染のミリイを頼り、また彼女に頼られて生きていくしかなかった。

「なにが？」

彼女は俯いていた顔を上げた。蒼い目はランプのオレンジ色を帯びていた。

「僕はずっと気になってるんだ。世界がどんな風に終わるのか」

相変わらずアキラはランプを見つめながら話していた。光の加減でそう見えるのか、どこか彼の表情は輝いているようにすら見えた。

「世界の終わり……？」

「うん。どうやって終わるのか。それを見に行きたいんだ」

ススで汚れたアキラの顔の中に二つの輝きがあった。

「見に行きたいってどこに？」

「……始まりと終わりの谷——サン・シエロ」

ミリイは目を大きく見開き、そして小さく息を呑んだ。

彼女が驚くのも当然のことだ。驚かないほうがおかしいのだろう。サン・シエロは辺境の地にある未開の谷だった。そこは軍によって嚴重に封鎖されていた。有刺鉄線のついたフェンスがどこまでも続いているという。さらに中は複雑に入り組んだ地形をしていて、入った者は命を落とすとも言われている。

「そんなところに見に行つてどうするのよ！？」

「確かめたいんだ」

「……何を？」

「理由を。どうして僕だけが生き残ったのか。どうして世界は終わるのか。何も知らないまま死ぬなんて嫌だ。それを知ったところでどうなるわけでもないけど、でも何もしないで死を待っただけなんて嫌なんだよ」

確固たる決意を持った言葉だった。

理不尽なこの世界。不公平なこの世界。両親と妹の死が意味もな
くただ運が悪かっただけ。自分が生き残ったのは運が良かっただけ。
そんな言葉だけで済まされてしまうのがどうしても嫌だった。三人
が死んで自分が生き残ったことの意味を見つけたかった。そうでな
ければやりきれない。

「僕は神様なんて信じちゃいない。師父さまたちみたいに神にすが
って死んでいくのは嫌だ。ミリイはこれからどうしたいの？」

「……私？」

「もうすぐこの世界が終わるって言うのなら、何かしなくていいの
？ 何もせずにこのまま膝を抱えて死ぬの？ そんなの僕は嫌だよ」

「私は……」

アキラはそつと尋ねた。

「怖い？」

ミリイは何も言わなかった。どこか迷っているようにも見える。
アキラも怖くないと言えば嘘だったが、今更「やめた」とは言えな
かった。仮にも女の子の前で見栄を張ってしまったのだ。それを貫
き通すしかない。それに、世界の終わりを見たいという気持ちに偽
りはなかった。

「バイク借りていくね」

アキラは静かに立ち上がって外へと通じる扉へと歩いていく。振
り返ればミリイは膝を抱えて座り込んだままでいた。

彼には何も言ってやれない。

後ろ髪を引かれる思いでアキラは聖堂をあとにした。

外は静けさに包まれていた。世界の崩壊なんて知らずに夜空には
多くの星が輝いていた。この光景だけ見ていれば世界の終わりなん
て嘘のように思えてくる。

しかし、ふとアキラは思った。

むしろその異様な静けさが世界の終わりなのかもしれない。

聖堂を裏口から出て教会の入り口のほうに戻つてくると、ぽつんと忘れ去られたように一台のバイクが停まっていた。サイドカー付きの二人乗りバイクだ。荒涼とした大地に月光の影を落としてただそこに存在するそれは、さらにも増してアンティーク感が漂っていた。だが走行に関して全く問題ないことは、普段からサイドカーに乗っている彼自身がよく知っていた。

アキラは目に焼き付けるように周囲をゆっくりと見回すと、静かに挿されたままのバイクのキーに手を伸ばした。キーをひねろうとしたそのときだった。

「待つて」

ミリイが一〇メートルほど後ろに立っていた。

「ミリイ……？ 見送りなんていいのに」

「違う。私も行く」

毅然とした態度でミリイは言い切った。

「えっ？」

「あんた操縦が下手なんだから、サン・シエロに着く前に死んじやったら可哀想じゃない。それにそのバイクは命の次くらいに大事なもののなんだから、壊されるようなことになれば死ぬに死ねないわよ」
そうどこかおどけた調子で彼女は言うのと、突然うつむき、腕を抱えて明後日の方向を見ながら小さな声でさらに付け加えた。

「それと、一人で居るほうがもっと怖いから……」

「じゃあ一緒に行こう」

アキラはうやうやしく右手を差し出した。

「恥ずかしいわい？」

「なにが？」

あきれた。

そう言わんばかりにミリイは大きく肩をすくめてみせる。

一向に出した手を戻そうとしないアキラを見てついに諦めたよう

だ。

「もう知らないわよ」

気恥ずかしそうに彼女はアキラの手に自分の手を重ねた。

その手を取って深々と一礼してバイクまで彼女をエスコートする。始終彼女の顔は真つ赤だった。

ミリイはバイクにまたがり、アキラはサイドカーのシートにすべり込んだ。

一気に緊張が高まる。こんな急ごしらえな計画でサン・シエロにたどり着けるのだろうか。万全な準備なくして無事に世界の終わりを見るのだろうか。心配事は多かったが時間もなかった。

ミリイがエンジンを噴かした。マフラーが唸り声を上げる。その音に反応するかのように荒涼の乾いた土が舞い上がる。

ミリイが複雑な表情をして背後の聖ミルド教会を振り返った。いろいろな感情が混ざり合った彼女の顔からは、今何を思っているのかアキラには分からなかった。

「寂莫の思いつてやつ？」

アキラはおどけた口調で尋ねた。

「別に。ただ、色々あったな、と思って……」

ミリイは対照的に沈んだ声で答えた。

「私たちの帰る場所はもうないわ」

彼女の視線の先には半壊した聖堂があった。次の地震で間違いなく倒壊するだろう。二人の帰ってくる場所はここしかない。

「もし世界が終わらなければまたここに帰ってきた方がいいし、前みたいに二人で違う町に行ったらいい。師父さまたちが戻ってこなかったら、教会を作り直して二人でやるのもいいな。そう思わない？」

「冗談。神様の存在なんて信じてないんですよ？ それじゃインチキ教会よ」

「そりゃそうだ。ミリイは神様を信じてるわけ？」

教会ということもあって、彼女に今までそんなことを訊く機会な

んてなかった。ただ彼は常々訊いてみたいとは思っていた。もしそれが師父さまたちに見つかれば咎められるのは間違いない。

「居ればいいと思うわ。何でもかんでも、嫌なことはあいつの責任にすればいいんだから楽よね」

神様をあいつ呼ばわりする時点で彼女の信仰心が薄いことは明白だった。

「やっぱり二人で教会は無理そうだ」

「そうね」

ミリイはおかしそうに答えた。

「じゃ、行こうか」

「ええ」

一段とバイクの音と緊張が大きくなる。

ただアキラには、二人でならサン・シエロまでいけるような気がした。根拠もなにもなかったが、不思議と恐怖はそれほどなかった。

さあ、世界の終わりを見に行こう。

第一話：二人で教会は無理だな（後書き）

ご閲覧ありがとうございました。

よろしければ感想などありましたらおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5256f/>

アダイヴ

2011年2月1日03時50分発行